

# VOICES from the ARCTIC

Vol.43 / 2024.12.26

ArCS II 国際政治課題  
北極域実践コミュニティ事務局



## 台湾・中央大と北海道大の 北極域研究機関、覚書を締結 共同研究始動へ



(桃園中央社) 中央大学 (桃園市) は2日、  
同大台湾極地研究センターと北海道大北極域  
研究センターの間で協力に関する覚書を締結  
したと発表した。今後、共同研究プロジェク  
トを始動させる他、双方の学生や研究者に相  
互訪問の機会を提供するとしている。台湾極  
地研究センターは昨年設立された。中央大に  
よれば、同大と北海道大の両研究センターは  
今後、人工衛星に載せた測定器で地球を観測  
する「衛星リモートセンシング」や持続的な  
極地変化観測などで共に研究を進める。また  
今後毎年、双方の学生や研究者に対し、相互  
に短期交流訪問の機会を提供するという。

記事参照：<https://japan.focustaiwan.tw/society/202407030009> (2024.7.3/フォーカス台湾)

## グーグル、翻訳サービスに 北サーミ語版を追加



Google翻訳の最新アップデートには、ロシア  
の様々な民族言語が含まれるようになった。  
2017年、ノルウェー・北極大学トロムソ校  
(UiT)は、北部サーミ語の無料のオープンソー  
ス機械翻訳を発表した。その後、Google翻訳  
がパイロットテストを導入し、現在、正式版  
が運用されているとGoogleは声明で述べてい  
る。

記事参照：[Google adds North Sámi to translation service - ArcticToday](https://arctictoday.com/news/google-adds-north-sami-to-translation-service-2024-07-03)  
(2024.7.3/Arctic Today)

## ロシア、スヴァールバルに ソ連国旗を掲揚

『Barents Observer』は今週、ソ連の大きな旗を3つ目撃した。ピラミデンの港にある石炭積み込み場では、ノルウェー国旗に代わってソ連旗が頂部に掲げられている。右側にはロシアの国旗も残っているが、ソ連旗ほど目立たない。数年前から、ピラミデンの港にある石炭積み込み場には、ノルウェーとロシアの国旗が掲げられていた。そして現在、ノルウェーの国旗は撤去され、はるかに大きなソ連の国旗に置き換えられた。ソ連時代におけるスヴァールバル諸島での立場を取り戻したいという懐古は、バレンツブルクでも際立っている。ロシアにおけるソ連の国旗の使用には二つの目的がある、とノルウェー・北極大学トロムソ校(UiT)のカリ・アガ・マイレボスト教授は言う。「バレンツブルクとピラミデンにおけるソ連のシンボルの使用は、アルクティクゴル（国有鉱山開発会社）の観光開発の重要な一部として位置づけられている。同時に、スヴァールバルにおけるロシアの存在感を強め、ソ連の偉大さと歴史的復権主義の考えを呼び起こす戦略となっている」と

『Barents Observer』に語っている。

記事参照：[Moscow hoists Soviet flags at Svalbard - ArcticToday](https://arctictoday.com/2024/7/1/Arctic-Today/Moscow-raises-Soviet-flags-at-Svalbard-ArcticToday)(2024.7.1/Arctic Today).



## ロシアの北極域の開拓者から 始まり、盗まれた穀物の輸送 に関与した者への制裁に至る まで

2010年にヨーロッパからアジアへの歴史的な航海で北極域航路を通過したばら積み貨物船 Nordic Barents号は、今年、ロシア占領下のクリミアからウクライナの穀物を積んでベネズエラに到着した最初の船となった。2010年当時、スエズ運河を通る航路と比較して40%も短い距離となるこの先駆的な航海は、新しい航路（北極域航路）の利用増加への期待を呼び起こした。しかし、ロシアによるウクライナに対する全面戦争により、ヨーロッパのほとんどの国が、北極域航路に関するロシアとの協力関係を打ち切った。Nordic Barents号はEnisey号と改名し、ロシアに拠点を置く同船の新しい所有者は、国際的な制裁の対象となっている。今年、Enisey号は、クリミアからベネズエラまで、2万7000トンの穀物を積んで航行したとされている。欧州連合と米国は、ロシアによるウクライナ産穀物の窃盗と輸出を非難している。

記事参照：[From Russian Arctic pioneer to sanctioned transporter of stolen grain - ArcticToday](https://arctictoday.com/2024/7/4/Arctic-Today/From-Russian-Arctic-pioneer-to-sanctioned-transporter-of-stolen-grain-ArcticToday) (2024.7.4/Arctic Today)

←ハンマーと鎌。かつての独裁政権のシンボルが、昨年夏、ピラミデンにある閉鎖された炭鉱の坑道の入り口付近の丘の上に置かれた。

(Photo: Novosti Spitsbergen on Telegram)

## アラスカの次の巨大油田を 低炭素化する企業の取り組み に迫る



石油会社は、燃焼時に地球温暖化につながる燃料を排出し、それが気候変動の助長に繋がっている。しかし、アラスカの巨大な新しい油田のひとつを開発している豪石油・ガス大手サントスの開発プロジェクト「ピッカ」は、大気中の二酸化炭素の濃度を低下させるプロジェクトによる相殺を訴える。サントスの計画は、ノーススロープの発電所や掘削現場から排出される二酸化炭素を回収し、さらに大気中から直接二酸化炭素を吸収し、地球温暖化の原因とならないよう地中に注入することを目指している。政治家の多くが二酸化炭素排出削減の必要性をほとんど認めないこの州において、このプロジェクトはアラスカの既存の石油産企業とは異なるアプローチであり、再生可能エネルギーに数十億ドルを投資しているBPやシェルといった欧州の大手企業により近いものだ。

他方で、炭素回収技術が化石燃料企業や政治家から関心を集めるにつれ、懐疑的な見方も出てきている。環境保護団体や一部の気候変動研究者によれば、この技術は生産量を減らして排出量を削減するためではなく、石油会社がより長期間にわたって原油を採掘し続けることを正当化するためであるとされている。

また、この技術の高額なコストや、炭素を地中に注入することによる潜在的なリスク(漏出、地下水の汚染、地震など)についても疑問が投げかけられている。

記事参照：[Inside a company's bid to make Alaska's next big oil field lower-carbon - ArcticToday \(2024.7.3/Arctic Today\)](#)



サントスの新しいピッカ開発により、アラスカ横断パイプラインに1日あたり8万バレルの原油が追加される可能性がある。写真は同パイプライン。

(Photo : Nathaniel Herz/Northern Journal)



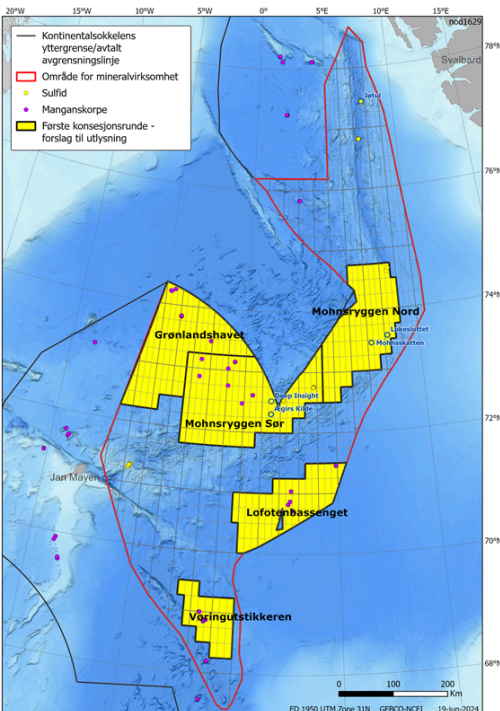
アラスカ北斜面のクーパーリック油田の石油インフラ。

(Source : Nathaniel Herz/Northern Journal)

## ノルウェー、環境問題の議論の中で海底鉱物を採掘する最初の国として歴史を刻む



ノルウェーのエネルギー省は先週ノルウェー大陸棚の海底鉱物探査に関するライセンスの公募を発表した。これによりノルウェーは海底鉱物の採掘を世界で初めて認める国となる見込みである。ノルウェー政府は環境への配慮を表明しているが、WWFノルウェー支部などの団体は、海底採掘は取り返しのつかない被害を及ぼす可能性があるとして主張している。  
 記事参照：[Norway set to make history as first nation to mine seafloor minerals amidst environmental debate - ArcticToday \(2024.7.4/Arctic Today\)](#)



## ロシア海軍設計局、民間用多目的砕氷艦を発表



ロシアの新しい砕氷艦は、探検航海、乗客クルーズ、科学調査の3つの用途に利用できる。船体とコンセプトデザインは、以前は海軍の戦闘砕氷船イワン・パパニンとして知られていたプロジェクト23550と、今後就航予定のFSB沿岸警備隊砕氷船に基づいている。今週海上試験が開始されるイワン・パパニンは巡航ミサイルを搭載しているが、今回の民間用新型砕氷艦は、上流階級の乗客や研究者が、より快適に過ごせるようになっている。  
 記事参照：[Russian Navy design bureau presents civilian multi-purpose Arctic cruise liner - ArcticToday \(2024.7.2/Arctic Today\)](#)



この「スターウォーズ」のような砕氷船クラスの船は、数年以内にスヴァールバル諸島とロシア北部の海域を航行するようになるだろう。(Source: Image by Almaz Design Bureau)

←ノルウェー領海内の大陸棚の黄色で示された部分については、企業が採掘ライセンスを申請することができる。  
 (Sauce: Credit: Sokkeldirektoratet)

## ノルウェー、スヴァールバル諸島最後の私有地売却を阻止 中国が関心を示したため

ノルウェー政府は、中国による買収を阻止するため、北極域スヴァールバル諸島にある私有地最後の売却計画を中止させた。スヴァールバル諸島南西部にあるソレ・フェーゲルフィヨルドの土地(60平方マイルの山岳地帯、平原、氷河)は、3億ユーロで売りに出されていた。買収計画の批判派は、売却価格と実現可能性について懐疑的である。この土地は、インフラが存在しないスヴァールバル諸島の南西部に位置し、建設やエンジン付きの乗り物が禁止されている保護区域を含んでいるため商業的価値はない。2016年には、政府は3350万ユーロを支払って、スヴァールバル諸島の2番目に最後の私有地であるロングイヤービン近郊の土地を取得した。この土地もまた、中国からの投資家の関心を集めていると報じられていた。

記事参照：[Norway blocks sale of last private land on Svalbard after Chinese interest | Norway | The Guardian \(2024.7.1/Support the Guardian\)](https://www.theguardian.com/world/2024/jul/01/norway-blocks-sale-of-last-private-land-on-svalbard-after-chinese-interest)



スヴァールバル諸島、ロングイェールビーン。2016年、ノルウェーはスヴァールバル諸島、ロングイェールビーン近郊の私有地のうち、2番目に最後の土地を購入した。

(Images/iStock photo)

## 北極で「電子の雨」による珍しいオーロラを観測、地上からは初

太陽風がやんだ28時間に現れた「ポーラーレインオーロラ」、「20年に一度」と研究者

2022年12月25日と26日、研究者たちはノルウェーのロングイェールビーンで珍しい「電子の雨（ポーラーレイン）」によるオーロラを観測した。一般的なオーロラとは異なるメカニズムで形成され、観測は極めて困難だ。

「このオーロラは非常に滑らかな形をしており、緑がかったものがただ広がっているような構造でした。まるで大きな緑色のケーキのようでした」と宇宙物理学者である電気通信大学大学院の細川敬祐（ほそかわけいすけ）教授は言う。細川氏らは、このオーロラが「電子の雨（ポーラーレイン）」による珍しい現象だと2024年6月21日付けで学術誌「Science Advances」に発表した。

記事参照：<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/at-cl/news/24/070200358> (2024.7.3/NATIONAL GEOGRAPHIC)



Images/iStock photo

## ～オピニオンシリーズ～

### 「北極域に近接する」中国が 北方の権力争いに参入

「北極域に近い国」である中国は、この地域で公然と軍事的存在感を示すことはできないため、900億ドル以上を科学調査に投資して経済的な追い上げを図っている。中国は2003年にノルウェーで初めてこの地域に進出し、研究拠点を建設して、この地域における影響力の拡大を開始した。また、北極域の他の国々とのつながりも築き、協議にも参加している。中国は、戦略的に北極域の国家プレーヤーとなるべく、20年以上前から動いてきた。その投資額は、米国が「ニューフロンティア」に費やした時間と労力をはるかに上回る。中国はまだ優位に立っているわけではないが、北極域での存在感を増し、維持していくために必要な協力やインフラ開発において、より影響力を行使し、成功を収める態勢を整えている。

記事参照：<https://www.arctictoday.com/opinion-near-arctic-china-joining-power-competition-in-north> (2024.7.8/Arctic Today)

**NATOはロシアの北極域進出に  
対応する戦略を必要としてい  
る** →

ワシントンD.C.で開催されるNATO創設75周年記念サミットは、北極域におけるロシアの存在感の高まりに対処するための戦略を策定する機会となるだろう、と大西洋評議会のウェブサイト上のブログ記事で、David Babikian氏とJulia Nesheiwat氏は書いている。

- ・サミットでは、ロシアの北極域における存在感の増大について取り上げられる予定である。これは、モスクワと中国の協力関係や、氷の融解の加速化により開通した新たな航路に関する懸念事項である。北極域におけるロシアの広範な軍事インフラは、同地域における戦略的重要性を反映している。ロシアは、北極域にNATO加盟国を合わせたよりも3分の1多い数の軍事基地を運営している。
- ・ロシアは、中国からの投資を大いに活用しながら北極海航路を戦略的に利用しており、エネルギーや鉱物資源の輸送をより効率的に行なっている。気候変動により、航路はさらに利用しやすくなり、北極の戦略的重要性は高まっている。
- ・米国、カナダ、北欧諸国などのNATO加盟国は、北極圏における軍事的プレゼンスとインフラへの投資を拡大している。
- ・国際的な制裁措置によりロシアの北極域でのプロジェクトは妨げられているものの、フィンランドとスウェーデンの加盟によるNATOの拡大によって、北極域における影響力が向上し、ワシントンでのサミットは、NATOの北極域における安全保障戦略を強化する好機となる。

記事参照：[Opinion: NATO needs a strategy to address Russia's Arctic expansion - ArcticToday](https://www.arctictoday.com/opinion-near-arctic-china-joining-power-competition-in-north) (2024.7.10/Arctic Today)

## 米国防総省、中露の北極協力の拡大に懸念

ワシントン(ロイター) - ロシアと中国は北極域での協力関係を強めており、地域の安定に影響を与える可能性があるとして、米軍は月曜日に同地域に対する戦略を発表した。報告書によると、ロシアは北極域にある数百のソ連時代の軍事施設を再開した。自らを「準北極域」国家と称する中国もまた、北極域での野望を抱いており「極地のシルクロード」を建設するつもりだと述べている。中国は、気温上昇に伴う氷の融解により、鉱物資源と新たな航路に注目している。「中国とロシアの間には依然として多くの意見の相違があるものの、両国がこの地域で足並みを揃えつつあることは懸念材料であり、国防総省は引き続きこの協力関係を監視していく」としている。今月、米国、カナダ、フィンランドは、同盟国の造船業を強化し、戦略的重要性を増す極地におけるロシアおよび中国に対抗することを目的として、砕氷艦を建造するためのコンソーシアムを結成する。NATO加盟3カ国は年末までにこの契約に調印する予定である。当局者は、この契約により、同盟国からの需要をプールして造船能力を拡大し、ロシアと中国にメッセージを送ることを目的としていると付け加えた。

記事参照：[Pentagon concerned at growing Arctic cooperation between China and Russia - ArcticToday \(2024.7.23/Arctic Today\)](https://arctictoday.com/2024/7/23/pentagon-concerned-at-growing-arctic-cooperation-between-china-and-russia)

## ロシア政府、米国防総省が懸念を表明した後、ロシアの北極域における中国との協力は他国を標的にしたものではないと発言

ロシア政府は火曜日、ロシアが北極域で中国と協力しているのは他国を標的にしたものではないとし、米国によるそのような活動への批判的外れであると述べた。米国防総省は月曜日に発表した報告書で、ロシアと中国の北極域での行動が地域の安定に影響を与える可能性があるとして懸念を示し、ロシアが北極域でソ連時代の軍事施設を数百カ所再開している一方で、中国は鉱物資源と新たな航路に目を向けていると指摘した。また「中国とロシアは、国家の力を示すさまざまな手段を通じて、ますます北極域で協力している」と述べた。米の報告書では「両国の地域における連携の拡大は懸念事項であり、(国防総省は)この協力関係を継続的に監視している」と付け加えられていたが、ロシアは、その内容の一部には対立的な色合いが見られるとし、ロシアと中国の協力は安定の促進のみを目的としていると述べている。ロシアが欧米諸国の制裁措置を背景に、中国への石油とガスの供給量を増やそうとしている中、中国とロシアは北極海の航路開発で一致協力している。

記事参照：[Kremlin says Russian Arctic cooperation with China is not aimed against anyone after Pentagon expresses concern - ArcticToday \(2024.7.23/Arctic Today\)](https://arctictoday.com/2024/7/23/kremlin-says-russian-arctic-cooperation-with-china-is-not-aimed-against-anyone-after-pentagon-expresses-concern)

## 米国国防総省の北極域戦略の中心は宇宙

北極域における新たな脅威と増大する課題に直面する中、米国国防総省は今週発表した北極域戦略の最新版で、宇宙を基盤とした能力の向上にスポットライトを当てた。「気候変動と地政学的環境の変化が、北極域に対する新たな戦略的アプローチの必要性を促している」と、7月22日に発表された戦略では述べている。また、国防総省は、戦略の重要な要素として、北極域を包括的にカバーするための、宇宙を基盤としたミサイル警告および監視のさらなる強化を強調した。

記事参照：[Space takes centre stage in U.S. Department of Defense Arctic strategy - ArcticToday \(2024.7.29/Arctic Today\)](https://www.arctictoday.com/2024/7/29/space-takes-centre-stage-in-u-s-department-of-defense-arctic-strategy)

## NATOの新しい地図

かつてスウェーデンのもとに統一されていた北欧諸国は、現在ではNATO加盟国となり、軍事力の統合に取り組んでいると『Foreign Policy』が報じている。これには、バルト海と北方高緯度地域との戦略的つながりを認識し、NATOの集団防衛の誓約の下で、これらの国々の領土をNATOの地図に組み込むことが含まれる。北欧諸国の軍隊を統合するには、インフラや指揮系統の調整など、後方支援面での課題が伴う。バージニア州にあるNATOの司令部は、これらの軍隊を統合するために適応しなければならない。一方、ノルウェー、フィンランド、スウェーデンは、陸・空・海・サイバー・宇宙の各領域にまたがる統合軍事作戦の策定に取り組んでいる。

記事参照：[NATO's new map - ArcticToday \(2024.7.30/Arctic Today\)](https://www.arctictoday.com/2024/7/30/natos-new-map)

『北極域実践コミュニティ VOICES from the ARCTIC』は、北極域実践コミュニティの情報発信の活動の一環として、北極域の多岐にわたる社会的課題やその解決に向けた取組に関連するニュースを集めて、ダイジェストしたものです。北極域の社会的課題と世界的な課題との関連性を示すため、国際連合『持続可能な開発目標 (SDGs)』の17の目標との対応関係を各ニュースに付しています。

### 【編集後記】

Vol.43は、2024年7月前半とオピニオンシリーズの記事を掲載しています。7月22日、米国国防総省は2019年以來の更新となる北極戦略を発表しました。同戦略ではロシア及び中国のプレゼンスの向上に対して多くの注意を向けています。本号の後半には、オピニオンシリーズとして、識者のコメントを纏めてみました。(大西)

